

『桑実寺縁起絵巻』と慶寿院の結婚をめぐって（上）

小谷 量子

【要旨】『桑実寺縁起絵巻』は、滋賀県近江八幡市安土町にある古刹桑実寺の由緒を描いた絵巻である。この絵巻は天文元年（一五三二）正月に、十二代將軍足利義晴の発願より制作され、同年八月十七日に桑実寺に奉納された。

絵巻制作当時、堺には足利義維、細川晴元、三好元長のいわゆる「堺幕府」があり、義晴は近江守護六角定頼の庇護の許、観音寺城に隣接した桑実寺に寄寓していた。そのため、先行研究では、桑実寺に天皇が行幸してくる絵巻を制作することによって、桑実寺を疑似都化し、義晴が正当な地位にいると主張することが、絵巻制作目的とされている。しかし近年の研究では、細川晴元と足利義晴・六角定頼は連携しており、むしろ細川晴元と足利義維・三好元長は分裂していたことが明らかになっている。絵巻の主題を改めて検討する必要があるだろう。

絵巻上巻は、全て伏線であり、桑実寺とは無関係の七光寺建立譚である。下巻は、上巻の最後から前へ話が逆転して戻っていくという、異例の構成である。下巻では上巻で父天智天皇に心配をかけた第四姫阿閉皇女が元明天皇となつて、自ら桑実寺に行幸してくると、日光・月光菩薩、十二神将が飛来し、桑実寺が完全な形になり話が終わる。この絵巻は、都の高貴な乙姫が成長し自らの意思で後から桑実寺に来ると、桑実寺に日光・月光が揃うという点が主題である。

また、天智天皇は寺建立の指示をするが、その後は全く登場しない黒幕である。天智天皇に指示された定患が実行者である。絵巻奉納の一年九ヶ月後、

桑実寺に近衛尚通五女慶寿院が嫁いで来る。この絵巻は、慶寿院の結婚と関係が深いと思われる。

『キーワード』 桑実寺縁起絵巻・足利義晴・慶寿院・細川晴元・天皇

はじめに

『桑実寺縁起絵巻』（重要文化財）は、滋賀県近江八幡市安土町叡山にある天台宗の古刹桑実寺の由緒を描いた絵巻である。この絵巻は享祿五年（天文元年・一五三二）正月に、十二代將軍足利義晴の発願により制作され、同年八月十七日に桑実寺に奉納されたことが、奥書及び『実隆公記』から明らかで、制作過程が詳細に判明する絵巻である。『桑実寺縁起絵巻』は現在京都国立博物館に寄託され、元禄九年（一六九六）に制作された副本が桑実寺に所蔵されている。この絵巻は、青蓮院が文明十五年（一四八三）に制作した「塔婆供養文」の内、桑実寺縁起部分を

テキストとし、三条西実隆が詞書を創作した。絵師は土佐光茂である。

絵巻制作当時、義晴は京都の戦乱を避け、近江守護六角定頼の庇護の許、観音寺城に隣接した桑実寺に寄寓していた。そして、桑実寺滞在中の天文三年、近衛尚通五女慶寿院（実名不詳のため出家後の名前で統一表記）が桑実寺に在る義晴の許に嫁いだ。

摂関家から将軍に嫁ぐことは先例がないばかりでなく、摂関家の女性が近江の一寺院まで嫁いでいったことも異例である。室町期の将軍御台は名家の日野家から出るのが慣例であり、天皇家も中宮・皇后は立てられず女房衆が妻妾を兼ねていた。そのため、摂関家・天皇家の女性は、身分に見合う結婚相手がなく、比丘尼御所入室が慣例である。また、結婚三週間後に義晴は上洛のため桑実寺を出て坂本に移り、三ヶ月後に入京する。桑実寺まで行かずとも、入京してから結婚すればよいと思われる⁽¹⁾。なぜ将軍家と摂関家の前例のない結婚が行われたのか、なぜ近江の桑実寺まで慶寿院が嫁いで行ったのか、その理由と経緯は慶寿院の父近衛尚通の日記にも記されておらず明らかではない。

この結婚後の義晴・義輝政権期において、近衛一族が守護間の和平調停役を務めるなど、幕府政治上大きな発言力をもつようになる。また、将軍の京都没落には、近衛一族も、将軍と共に京都を退去し、将軍家と近衛家は外戚という以上に一体化し、「足利―近衛体制」とさえ言われる⁽²⁾。

そこで本稿は、『桑実寺縁起絵巻』と慶寿院結婚との関連について検討したい。『桑実寺縁起絵巻』を分析することで、その後の幕府政治に大きな影響を与えたこの結婚が、どのような経緯で実現したのか明らかになるであろう。

まず、先行研究を概観しておこう。『桑実寺縁起絵巻』は『続日本絵

巻大成十三』『続日本の絵巻二十四』（共に中央公論社刊）にカラー写真が所収され、島谷弘幸氏・吉田友之氏・小松茂美氏の解説に詳しい。本稿では、諸般の事情により、図版を載せることはできなかったため、そちらを参照して頂ければ幸いである。

吉田友之氏は『実隆公記』に記された制作経緯を紹介し、義晴が畿内諸勢力調伏を祈願し絵巻を制作したとしている⁽³⁾。榊原悟氏は、詞書の書体を分析し、執筆者の分担箇所を検討した⁽⁴⁾。島谷弘幸氏は『桑実寺縁起絵巻』と三条西実隆の関係を主に書流から検討した⁽⁵⁾。鈴木景二氏は、葉師寺領豊浦庄と桑実寺の関係、「桑実寺縁起」の成立について考察した⁽⁶⁾。松本裕美氏は、「桑実寺縁起」と古代薬師・観音信仰の関係を論じた⁽⁷⁾。高岸輝氏は、『桑実寺縁起絵巻』は亡命政権（義晴政権）が臨時首都を聖地化する意図が基調をなしているとする。そして絵巻の奉納日は実隆の伯父甘露寺親長の命日であり、親長三十三回忌供養を実隆がこの絵巻に忍ばせたとする⁽⁸⁾。

絵巻の描写・主題について詳しく検討したのが、亀井若菜氏である⁽⁹⁾。亀井氏は、下巻第一段が桑実寺周辺の実景に基づくものであることを明らかにした。さらに、義晴が桑実寺で天皇と共に会し、正統的立場にいるという主張が絵巻の主題であるとする。そのため、桑実寺を疑似都化して描いたとする⁽¹⁰⁾。この見解が、現在の通説といつてよいだろう。

しかし、亀井氏は解釈の前提として、今谷明氏の細川氏研究を挙げており、現在は今谷説を前提として考えることはできないといえる。また、亀井氏が解釈の前提として挙げた脇田晴子氏・今谷明氏の「戦国期天皇權威浮上論」も歴史学界においては当初から批判が出されており、現在は否定されているといつてよいだろう⁽¹¹⁾。

さらには、『後愚昧記』によれば、足利義満は「京都地事、公家御計也」⁽¹³⁾と述べている。室町期においても京都は平安京であり、天皇家のものと考えられていたのである。桑実寺に天皇を描くことによって桑実寺を「疑似都化」⁽¹⁴⁾、「疑似平安京化」することはないだろう。現代的な「首都」と、当時の「都」に対する認識は異なるのである。さらには、坂本の義晴を三条実香が訪ねた際、滞在する金宝寺を「陣」としている⁽¹⁵⁾。桑実寺も「陣」であり、義晴にとって桑実寺はあくまで一時動座している場所にすぎず、また、そうであらねばならないのである。

そこで本稿では、第一節で、前提となる義晴桑実寺滞在の原因及び、畿内政治状況を確認する。第二節で『桑実寺縁起絵巻』の内容を検討し、第三節で絵巻主題を検討し、制作目的について仮説を提示したい。

なお、以下『桑実寺縁起絵巻』先行研究の見解は特に断らない限り、亀井若菜氏「桑実寺縁起絵巻について」(『表象としての美術、言説としての美術史』ブリュッケ、二〇〇三年)による。

第一節 『桑実寺縁起絵巻』制作時の政治状況

將軍義晴が桑実寺に滞在することになった原因と、『桑実寺縁起絵巻』制作依頼時の政治状況について確認することがまず必要だろう。事の発端は、大永六年(一五二六)、細川高国が家臣の香西元盛を殺したことに始まる。原因は細川尹賢が高国に讒言したためであった。これに対し、元盛の兄弟である波多野植通と柳本賢治が高国に叛旗を翻した。

すると、細川晴賢、細川元常、三好政長等が四国から堺に渡海し、柳本等と合流した。そして、大永七年二月十三日川勝寺の戦いで、高国、若狭武田元光連合軍を破った。三月、細川晴元、義晴の異母兄弟で細川讃州家で養育されていた義維も、三好宗家の当主三好元長と共に堺に上

陸した⁽¹⁶⁾。

六月、義維は朝廷に太刀・馬を献上し任官を願いが叶わず、七月再び任官・敘爵を申し入れ、義維と名乗り従五位左馬頭に任じられた⁽¹⁷⁾。十月に義晴・六角定頼・朝倉教景・薬師寺国長・細川尹賢・武田元光などが入京し⁽¹⁸⁾、十一月に柳本・波多野・三好元長等が入洛し、東寺近辺で戦いがあった。

翌大永八年(享祿元年)一月十七日、三好元長と義晴・高国は和睦した。しかし、柳本はこれに反発し、三好政長等と共に京から退去した。

二月九日、三好元長は堺へ下り、晴元上洛を願いが出たが、不調に終わった⁽¹⁹⁾。四月二日に開陣となり、義晴は相国寺に入った。その後、晴元との和睦が不調だったため、高国に従っていた摂津国衆が下国し、五月十四日、孤立した高国・尹賢は近江に下った。しかし、晴元は義晴に対しては崇敬を約していた。晴元は近日義晴に礼賛することを約したが、堺に義維がいる以上晴元の真意は測りがたいとし、二十八日義晴も六角定頼と共に近江に退去した⁽²⁰⁾。

七月、三好元長が下山城守護代に任じられた。このため、高国・義晴が去った後、京都に復帰していた柳本は、髻を切り晴元に抗議して京都を去る⁽²¹⁾。義晴は改元を申し入れ、八月二十日享祿と改元された。二十八日には義晴上洛の噂が京に流れたが、義維との間に調停が成立せず、義晴は朽木へ移った。京都は為政者不在・治安維持組織不在であった⁽²²⁾。

その後の動きを馬部隆弘氏の研究に従ってみていこう。翌享祿二年(一五二九)、柳本は晴元・伊勢貞忠と義晴擁立の話をもとめ上洛する。

そのため、柳本と対立していた三好元長は四国へ下国した⁽²³⁾。晴元は、享祿二年三月に、政所執事伊勢貞忠の意を受け、將軍御料所桐野河内が干損のため、洛中の米屋に供御米を出すよう命じた細川家奉行人奉書を出

している⁽²⁴⁾。また、享祿二年十月に、近衛尚通は日記に次のように記している。

十九日 西院庄・下桂庄・五个庄等付折紙処、得其心之由申間、大慶此事也、從朽木大樹被仰付、六郎申付折紙、柳本・松井兩人書出也、⁽²⁵⁾

近衛家領西院庄・下桂庄・五个庄安堵について、義晴から晴元に命じて、柳本・松井の折紙が出た。なお、松井宗信は、永正の政変の際、澄元に從い淡路に逃れた細川政賢流典厩家の被官で、この時期は柳本賢治と共に連署状を出している⁽²⁶⁾。

さらに、この連携には六角定頼が協力しており、六角定頼から朽木植綱宛てに、①將軍御料所、奉公衆の知行地確保を晴元が嚴重に命じたこと、②高国が朽木に入ることは禁じていること、③義晴上洛は遠くなく、義晴が入洛し平静にならなければ、定頼も朽木植綱も面目を失うことを知らせた書状が出ている⁽²⁷⁾。

このように、六角定頼が、義晴と晴元との和解を仲介し、享祿二年六月末には、義晴上洛が間もない段階まで話が進んでいた。既に大永七年二月に六角定頼の女と晴元の縁組が定まったと和泉上守護代松浦守が高野山に報じている⁽²⁸⁾。川勝寺の戦いの頃から、すでに六角と晴元の協力関係が結ばれていたのではないだろうか。馬部氏が指摘するように、義晴と晴元・柳本は連携していたと見て間違ひなからう。しかし、享祿三年六月刺客によって柳本賢治は殺され、義晴上洛の話は潰えてしまう。

ここまでの動きをまとめると、大永八年以来、晴元は一貫して、義晴崇敬を約しており、義維將軍擁立は考えていなかったといえるだろう。

晴元・三好・柳本・松井は親兄弟や主君を高国に殺され、高国に家督を奪われていた。その遺恨が戦いの原因であり、抑々義維を將軍にするた

めの戦いではない。この間最大の被害者だったのは、京都在住者であろう。京都は為政者不在で、度々戦場になり入れ替わり他国軍が駐留した。近衛尚通は享祿元年から義晴・柳本・晴元と連絡をとり家領や地子保全に努めている⁽²⁹⁾。天皇も義晴と改元を相談し、伝奏を朽木の義晴に遣わしている⁽³⁰⁾。朝廷社会も義晴の京都復帰を望み、義晴を正式な將軍として認めていた。

続けて、享祿三・四年の動きを見ていこう。柳本が殺害されると、七月十四日高国勢の内藤彦七が入京して四国勢と戦い、高国は、浦上村宗と同盟を結び、摂津を攻略した⁽³¹⁾。一方、晴元は阿波から三好元長を呼び戻し、細川持隆も堺に上陸した。赤松政村の寝返りにより高国は敗北し、尼崎で捕えられ自害に追い込まれた。そして、義晴は長光寺・桑実寺へ移った⁽³²⁾。

しかし、八月になると、晴元と持隆が互いに籠城する事態になった。原因は持隆がかばう三好元長と晴元側近木澤長政の不仲であった⁽³³⁾。翌享祿五年正月、三好一秀が賢治の後を継ぎ下京にいた柳本甚次郎を攻め、二十二日甚次郎は討死にした。二十三日これに怒った晴元が元長を折檻し、持隆の仲裁で元長は髻を切った⁽³⁴⁾。このように、高国死後、細川晴元・三好元長・細川持隆・柳本甚次郎の四国勢は分裂していた。このような四国側分裂の最中、享祿五年正月二十一日に、桑実寺の義晴から、実際に『桑実寺縁起絵巻』制作の依頼が届いた。使者は義晴侍医で、近衛家にも度々訪れる医者の上池院で、これは十七日付の書状であった。

その後、三月には晴元と元長の間を取り持ってきた持隆が晴元と義絶し、阿波へ下国してしまい、六月晴元の依頼によって本願寺が元長を攻め、三好元長は自害し、十月足利義維も没落し、十一月晴元と義晴は和解した⁽³⁵⁾。

まとめると、『桑実寺縁起絵巻』制作の依頼が届いたのは、高国が敗死し、四国から呼び寄せた元長が力を持った時期であった。四国側が分裂した理由は、不仲という以上のはっきりした原因が不明だが、細川晴元・足利義維・三好元長は、目標がそれぞれ異なっていたのではないだろうか。

晴元の最重要目標は京兆家当主になることである。晴元の敵は細川高国であり、義晴ではなかった。晴元にとって、高国が死んだ以上義晴と戦う理由はなく、かつ、義晴を廃し、義維を立てる大義名分もメリットも軍事力もない。明応の政変においては、日野富子・伊勢守などの幕府内の後楯・承認が細川政元にあったが、晴元の場合は、そうした後楯もなかった。義維を立てても、各方面からの支持が得られる見込みがないのである。のみならず、義維を將軍として推戴するには、義晴支持勢力との戦いに勝ち抜かねばならないが、晴元にそれだけの軍事力と能力があったとは考え難い。後に義昭を推戴して入京した織田信長でさえも、畿内近国を平定するのに、多くの時間と労力を費やしている。まだ十代で、しかも三好以外に十分な軍事力をもたない晴元が、義晴と手を結び、京兆家当主になる道を選ぶのは当然であろう。

一方、元長の最重要目標は、三好之長の仇打ちと、権益拡大、地位・身分の上昇であろう。後に、元長の息子実休は細川持隆を殺し、長慶は晴元を幽閉するが、三好にとつて最終目標は、細川家に代わる守護になることではないだろうか。すでに、永正十六年、淡路守護細川尚春が三好之長に殺されており、近国の播磨守護赤松義村も守護代浦上村宗に殺されている。越前では守護斯波氏に代わって守護代朝倉氏の越前支配が認められていた。朝倉に守護職を認めた以降は、実質的にその国を支配している者が守護家とは別に、実質的「守護」と認められる可能性が生

まれたのである。晴元にとって高国亡きあと最も警戒すべきは、三好元長であろう。

義維は將軍になることが目標だが、晴元が義晴側についている以上、三好元長に頼らざるを得ない。義維がいる以上晴元は義晴から信頼を得ることができず、元長にとってはそこにつけ込むすぎがあり、義維は利用価値がある。

このように『桑実寺縁起絵巻』制作時の政治状況を検討すると、前提となる歴史状況の、見直しが必要であろう。晴元は義晴・六角と結んでいたのであり、かつ、正統性という点では、明らかに義晴が唯一無二の將軍である。抑々、この争いは、將軍家・細川京兆家の家督争いであり、天皇を家督争いの正統性の根拠にすることはありえない。まして、絵に描いた古代の天皇と共にあることをもって、正統性を主張したという例は皆無である。絵に描いた天皇と共にいることをもって、桑実寺が疑似的都であると義晴が主張し、実際に絵巻まで作らせたとすれば、家臣や都から来たものに不安を抱かせることにしかならない。多くの家臣を率いる將軍が、現実逃避することはできないのである。

第二節 『桑実寺縁起絵巻』内容の検討

絵巻の主題を探るには、先ず絵巻そのものを検討することが重要だろう。そこで本節は『桑実寺縁起絵巻』を改めて検討したい。まず、上巻から見ていこう。なお、詞書は現代語に要約することとする。

上巻第一段

詞書・江州桑実寺の起こりは、昔、海上に生えた桑の巨木に、三粒の実を結んだ。一つは金鳥、一つは白兔となった。これは日光・月光菩薩の垂迹である。一つは地に落ちて山となり、桑実山になった。その形は

天蓋のようであったので、皷山と名づく。聖徳太子は三十三歳の厄難を払うため山の石の上に千手観音を安置し、観音正寺と名付けた。桑実寺は病消滅の霊場で眺望不思議の霊地である。本尊薬師如来の由来を明らかにしよう。

絵・絵巻巻頭(第四紙)は、藍と胡粉の霞がたなびき、海上から生い出た桑の大樹が、画面いっぱい描かれ、白兔と金鳥が遊ぶ幻想的な伝説場面から始まる。

桑の大樹から落ちた三つの実のうち二つが日光・月光菩薩の垂迹である金鳥と白兔となり、三つ目の実が桑実山(皷山)になったと桑実山の由来を語るのだが、その後のストーリー展開の中で、金鳥と白兔は全く登場せず、なぜ必要なのか不明である。桑実山の由来を語るのには、「桑の実が落ち桑実山になった」で十分である。しかし実は、金鳥と白兔はこの絵巻で重要な役割を果たしている。これは下巻ラストシーンの日光・月光菩薩の飛来の伏線である。鑑賞者がそれを読み解くことを、この絵巻制作者は想定しているのである。

さて、白兔の視線に導かれ、第五・六紙に進むと、そこは二紙を繋いで山奥の寺の境内になる。三人の僧綱襟の高僧、袴をたくし上げた麓の住民と思われる参詣者三人以外は、全て貧しい身なりの巡礼者で、描かれているのは男性のみである。伝説世界から現実の人間世界へと、対照的な世界への画面転換である。

しかし、ここでも鑑賞者は読み解きを要求されている。この場面を見た鑑賞者は、ここを桑実寺だと思おう。実際小松茂美氏はこの場面を桑実寺の真景とした。³⁷⁾しかし、下巻の桑実寺が描かれる場面に至り、鑑賞者は上巻巻頭の寺とよく似た建物が並ぶが、伽藍配置も、伽藍の細部も、境内の地形も異なっていることに気づく。鑑賞者は下巻の桑実寺

と上巻巻頭の寺を見比べることになる。

実は、この寺は観音正寺であり、³⁸⁾桑実寺ではない。桑実寺の縁起を語る絵巻巻頭がなぜ観音正寺なのか、ここでもまた鑑賞者は腑に落ちない気持ちになる。しかし、この対比・比較こそがこの絵巻制作者が鑑賞者に求めるところであり、観音正寺の現実的、人里離れた山間の男性世界と比べることによって、桑実寺の非現実的な都世界、女性世界を際立たせるための伏線である。

吉田友之氏は、巻頭第一段は絵巻導入の画面の伝統からかけ離れたものとする。補足すると、絵巻は通常、最初に物語の主人公または、テーマにまつわる場所が登場し物語の発端が語られ、順を追って主人公または、テーマの場所を中心にストーリーが展開する。しかし、この絵巻第一段は大変印象的な大画面構成だが、桑実寺とは直接関係のない画面であり、登場した桑の大樹・白兔・金鳥・観音正寺はその後のストーリー展開に全く登場しない。これらは全て伏線である。

上巻第二段

詞書・志賀の都に靈病が起こり、天智天皇の第四姫阿閉皇女も重篤な病に罹る。姫が夢で湖水に妙観世音の音を聞き、瑠璃の光が七方に差しているところを見たと話す。

絵・場面は時空間を飛び越えて、天智天皇の志賀の都に移る。第四姫の阿閉皇女の寝室が細やかに源氏絵的に描かれる。鑑賞者は、観音正寺の現実的で屈託のない庶民的な室町期の男性世界から、突然、物語絵的に深刻な深窓の姫君の、古代女性世界へと導かれる。

ここでも観音正寺は対比の対象である。第一段の観音正寺は立派ではあるが殺風景で、万人に公開された非日常的な室町期の観音霊場であるのに対し、第二段は庭の前栽、室内の調度も細やかな、親密で濃厚な平

安期の深窓の姫君の日常世界が描かれている。源氏絵のような画面を見た鑑賞者は、この絵巻は女性のために作られたのではないかという印象をうける。

このように、伝説世界、現実世界、物語世界と、時空間が何の脈絡もなく移動するのも絵巻としては異例である。しかし、この異なる時空間は下巻最後で全て一つの世界に融合されるのである。

上巻第三段

詞書・姫の夢の話聞いた天智天皇は、定恵和尚を粟津宮に召し尋ねた。和尚は、「琵琶湖は弁財天の浄土であり、天女が徳輝を輝かし、龍王と化し琵琶を尊形とします。この湖はその像であり、竹生島は福聚を掌ります。弁財天は八大龍王の変化、湖水の下は竜宮城です。龍宮城には生身の薬師如来が安置されており、この尊天の擁護により薬師如来が出現し御病気が忽ち治る御瑞夢です。精诚を致し、叡慮をこらせるべきでしょう。」とお答えした。天皇はその話に聞き入った。

絵・粟津の宮で天智天皇が、中臣鎌足長男定恵を召し、香衣の定恵の話を聞くとところが描かれる。縁には文官と武官が控え、話を聞いている。門前には塗輿が描かれ、定恵和尚が急いでやってきたことが表現されている。塗輿は室町期における普段用の輿である。

定恵は若くして渡唐し、帰朝後まもなく死去したとされるが、ここでは天皇の信任厚い高僧として描かれる。定恵は、僧侶として高名というよりは、藤原氏の祖鎌足の息子として有名なのである。桑実寺が藤原氏ゆかりの寺であることを表しているのだと鑑賞者は読み解かねばならぬ。また、文官・武官が控えているのは、ただ話を聞いているのではなく、ただちに寺建立が命じられたこと表している。

そして、定恵の答えから、なぜ第四姫の阿閉皇女(元明天皇)が主人

公なのかを鑑賞者は読み解くことが求められている。天智天皇の娘で天皇になったのは、持統天皇と元明天皇である。天武天皇妃であった持統天皇は有名だが、元明天皇は、平城京に遷都し、和同開珎を鑄造するなど事績は多いが、持統天皇に比べると著名度は低い。しかし、藤原不比等を重ねたことで知られ、藤原氏興隆の礎を作った天皇である。さらに、持統天皇が大姫で、元明天皇は妹の乙姫である。乙姫は、竜宮城に住むとされる。元明天皇が乙姫であり、弁財天の化身であると鑑賞者は読み解かねばならない。

上巻第四段

詞書・天智天皇は光の差すところに七光寺を建立し、定恵和尚に法会を行わせた。すると海底に金色の光が現れ、竜宮城の東門である粟津の磯辺に生身の薬師如来が現れた。その光は、阿閉皇女の病床に差し込み、姫の病は速やかに平癒した。

絵・第十六紙・十七紙の二紙に渡り、七光寺での盛大な法会が描かれる。本堂では高僧が論議を行い、庭では多くの僧が仮屋に控え、雅楽が演じられ、楽屋では次の舞人が準備をする。三人の公家が庭に座り、その後ろや、本堂の縁には見物人が詰めかけている。覗きに来た二人の者は追い払われる。法会の場面は異時同図である。論議と雅楽という異なる時間に行われた行事を同図で描いている。

また、阿閉皇女は平安時代の源氏絵風俗で描かれていたが、法会の見物人は室町期の風俗である。しかし、時代設定は大津京時代である。つまり、大津京時代と平安時代と室町期が混然一体となっているのである。この絵巻は、「過去と現在、現実と物語の融合」になっている。

なお、追い払われる人物は東京国立博物館蔵『月次祭礼図模本』の始の場面にも描かれており、盛大な行事を表す一種の定型である。そし

て逃げていく方向に目を転じると、人々が驚き走りだしている。さらに前方の人々はすでに跪き、湖水を拝んでいる。拝んでいる先には、湖水から金色の薬師如来が化仏を従え現れる。この場面は、画面を動かしながら鑑賞する絵巻の特性を生かした表現である。

しかし、この場面でも鑑賞者は腑に落ちない思いをすることになる。まず、この寺を建立した願主である天智天皇も阿閉皇女も法会に出御していないのである。阿閉皇女は病気で出席できないとしても、天智天皇も出御しないのはなぜだろうという疑問を持つのである。つまりこの法会は非常に盛大なのだが、肝心の願主である天皇不在のまま行われている。しかも、本尊の薬師如来も不在である。薬師如来は、後から来るのであり、本尊・願主不在の盛大な法会なのである。上巻は後から薬師如来が出現し話が終わる。下巻では、日光・月光菩薩が後から桑実寺に来て話が終わる。この絵巻は、「後から寺に来る」が、キーワードである。

さらに、本堂の縁に居るのは全て被衣かすきの女性である。男性の公家は庭で見物しており、しかも三人しかいない。そして、公家の後ろで見物する人々もほとんどが女性である。男性の見物人は長小結の少年と武士が一組、後は僧・稚児で七人しかおらず、しかも末席である。つまり、男性はほとんどが役目として法会に参加しているのであり、自らやってきた見物人は、ほとんどが女性である。これも珍しいことである。

くわえて、「竜宮城の東門粟津の磯辺」に薬師如来が現れたとするが、粟津は琵琶湖の西岸であり、東方浄瑠璃界を表すためのものか、桑実寺は琵琶湖東岸であり、下巻で薬師如来が東岸に移動する伏線なのか不明である。

ラストシーンは、唐崎の松が描かれ、ここが天津の宮であること示す。

唐崎は天智天皇が奈良の三輪山から大己貴神を天津に勧請した際に、神

が琵琶湖を渡り、降り立った地とされており、天智天皇縁の名所である。祭神は女別当命で琴御館宇志の妻とされる。やはり女性が主人公である。ここでも、鑑賞者は唐崎の松の由来を知っていることが求められている。そして、大樹が始まった上巻は大樹で締めくくられる。

上巻を見終わった鑑賞者は、この絵巻は女性が主人公の絵巻であることに気づくであろう。阿閉皇女だけでなく、法会の見物者も、唐崎の松の祭神も女性である。さらに、鑑賞者はこの法会が行われた寺が桑実寺だと思ふのだが、よく注意してみると、この寺は七光寺であり桑実寺ではない。つまり、上巻は『桑実寺縁起絵』でありながら、桑実寺は全く出てこないのである。とはいえ、後にこの寺が桑実寺になったのだろうと思うのだが、下巻を読み進めると明らかのように、この七光寺は桑実寺とは全く別の寺で、無関係である。桑実寺と関係があるのは、定恵と阿閉皇女と湖上に出現した薬師如来である。つまり、上巻は全て伏線なのである。

下巻第一段

詞書・やがて、薬師如来は虚空高く上り東方に向かつて行った。海中から大白水牛が現れ如来を乗せ、八大菩薩童子が周りを囲み当山の西の磯に着け、牛は湖の底に帰った。これは帝釈天の変化である。このところを「牛打鼻」という。梵天が岩駒と化して如来を乗せ、桑実山に飛び移った。桑実山瑠璃石にその足跡と岩駒の蹄の跡が今もある。

精舎を速やかに建て、定恵和尚を導師として薬師如来を安置した。それ以来、参詣の輩、歩をはこび、肩をきそう。八大菩薩は厄災を払い、夜又は九死をのぞく。日光・月光菩薩はその頂きを照らし、十二神将は冥助を加える。

絵・第三紙は琵琶湖上空を白水牛にのった薬師如来が、八童子を連れ

安土山の先端、牛打鼻に着き、白水牛が踵を返す異時同図である。帝釈天と梵天はともに仏法の守護神としてセットで描かれることが多い。帝釈天は東方を守り、梵天は上方を守る。東に飛来した薬師如来は、上方へと移動するのである。しかし、帝釈天は東寺講堂の帝釈天像のように白象にのった姿であらわされることが多い。水牛に乗るのは大威徳明王である。牛が引き返すのは、牛頭天王信仰と関係があるのかもしれない。さらに、薬師如来は日光・月光菩薩を脇侍とし、十二神将が守る。しかし、詞書にはある日光・月光菩薩、十二神将・夜叉が描かれていない。つまり、薬師如来は仮の姿・不完全な形でやって来るのである。

なお、安土町総見寺蔵「近江国蒲生郡安土古城図」によると、安土山の先端は「鹿カ鼻」となっている。元禄六年(一六九三)に起きた下豊浦村と南須田村の山論相論において、桑実山の境界が問題となっており、その中に「牛打」の地名が出てくるので、「牛打」は実際には、桑実山中の地名だと思われる⁽⁴⁾。

四紙・五紙に渡り、豊浦庄の全景が描かれている。六紙は桑実寺中門付近の院家と叡山が描かれる。第七紙は桑実寺で、定恵が堂供養を行い、結願に集まった人々が描かれる。結願者の何人かが指差し、手をかざして見ている方向に目を移すと、瑠璃石の上に岩駒と薬師如来が立っている。

先行研究は下巻第一段が桑実寺から見た景観と一致することを指摘し、現在石仏巡り第一番がある岩上から周囲を見渡した景観を描いたものとした。そして、桑実寺一帯の土地全体像を表そうとしているのは、義晴が身を置く桑実寺を絵に描いて顕示し、絵に描かれるほどの土地であることを見せようとしたとする。確かに、岩上から見た景観と絵巻に描かれた安土の景観はよく似ている。土佐光茂は桑実寺を訪れているこ

とが『実隆公記』享禄五年五月二十日条から確認でき、光茂が桑実寺近辺から見た実景を基にこの場面を描いたことは間違いないだろう。安土城建築以前の安土の景観を知る材料として興味深い。

しかし、『桑実寺縁起絵巻』が単一固定視点からの実景描写であるという点については、再検討が必要だと思われる。桑実寺本堂、瑠璃石を、描かれているような高い視点から見ることができるところは存在しない。豊浦の集落も実際より近く、大きく、高い視点で描かれている。つまり、実景を基に描いているが、単一固定視点から見た図ではないのである。また、高い地点から下方に広がる世界を見下ろす構図は、湯木美術館蔵『春日曼荼羅』(鎌倉時代)や、遊行寺蔵『一遍聖絵』にもみられ、霊地を描く場合に多く用いられた俯瞰図である。『桑実寺縁起絵巻』も写生画ではなく、霊地を描いていると思われる。

では、第一段の俯瞰景観描写は何を描いているのであろうか。結論を先に述べれば、桑実寺が小別当を務める薬師寺莊園豊浦庄を描き、その地が三方が山に囲まれ一方が開け湖に面し川が流れる、平安京に似た平安楽土の吉祥の地であることを描いている。そして豊浦庄の入り口である北腰越峠に、薬師如来がさしかかったところが描かれているのである。豊浦庄と桑実寺は一体の関係にあり、単に桑実寺から見た景観を描いたのではない。

さて、豊浦庄と桑実寺の関係については、鈴木景二氏⁽⁴³⁾、角田文衛氏⁽⁴⁴⁾の研究がある。両氏の研究に従ってまとめると、豊浦庄は天平感宝元年(七二九)聖武天皇が薬師寺に施入した墾田地であり、施入文が「聖武天皇施入直願文」として、『大日本古文書』に収録されている⁽⁴⁵⁾。「水田一佰町、(近江国蒲生郡)四至東限神崎蒲生堺并佐々木山長峰、南限鳥坂長峰、西限五条畔、北限大渭」とあり、『近江蒲生郡志』によれば叡山、

腰越鳥打、琵琶湖に囲まれた地域で、西限は安土村常楽寺から沙々貴神社に通じる道のあたりと推定している。ここに示された豊浦庄の範囲は、『桑実寺縁起絵巻』に描かれた範囲とほぼ一致し、慈恩寺まで含めると『桑実寺縁起絵巻』に描かれた範囲は安土城下町の範囲と一致する⁽⁶⁾。(地図参照)。

その後、承久の乱の褒賞として、佐々木信綱が地頭職に任じられ、長享元年(一四八七)の義尚の六角征伐により、大乘院が薬師寺別当として豊浦庄を知行した⁽⁷⁾。『大乘院寺社雑事記』によれば、豊浦庄は三千石の荘園で、年貢千四百石から下司給、公文給・桑実薬師小別当分等が支払われ、残り千石の内、三百石は薬師寺直納分、七百石余が別当分であった⁽⁸⁾。尋尊は「桑実寺ハ古所見事所也、山伏在之云々⁽⁹⁾」と記す。このように、室町期においても、桑実寺が豊浦庄の小別当として、現地支配を行っていたことが確認できる。

桑実寺が位置する場所は、桑実山西面で最も大きな谷筋で、現在も参道に沿って川が流れる(地図参照)。「江州蒲生郡豊浦庄与須田村山論立合絵図⁽¹⁰⁾」(個人蔵)は近世に作られた絵図だが、豊浦庄は桑実山から流れる川によって灌漑されていたことがわかり、それは現在の地図からも確認できる。桑実寺が位置するのは桑実山から豊浦庄に流れる川の中で最大の川の支流にあたる。つまり、水源に位置しているのである。桑実寺が豊浦庄にとって重要な寺であることはこのことから明らかである。そして、「江州蒲生郡豊浦庄与須田村山論立合絵図」では、山の麓から川沿いの田は桑実寺領となっている。豊浦庄で水利に恵まれた田は、桑実山に近いところと川添いの場所である。『大乘院寺社雑事記』には、「御米ハ山ノ前一千町、山ノ後一千丁ノ田名田ヨリ出之⁽¹¹⁾」とあり、豊浦庄の田は「山の前」と「山の後」の区別があったことが分かる。「山の後」

地図1 桑実寺周辺地図

太直線を書き入れた場所が『近江蒲生郡志』による推定古代豊浦庄西限曲線で囲った地域が安土城下町 国土地理院電子地図を基に作成
 ＊瑠璃石 ★石仏巡り第1番岩



は桑実山から離れた地域という意味だろう。

『桑実寺縁起絵巻』の下巻第一段に描かれた田は、桑実山に近いところと川添いの平地の田が大きく、安土山に近い桑実山から離れた田は小さい。これは、「山の前」・「山の後」を描いているのだろう。但し、水田は水平に作るもので、傾斜している田はありえない。『桑実寺縁起絵巻』の傾斜し波打っているような田は、「うねうねと続く田」を描いている。

また、近世に桑実山を挟んだ隣村の須田村と、桑実山の境をめぐる相論が起きたことが、「江州蒲生郡豊浦庄与須田村山論立合絵図」からわかる。桑実山は柴をはじめとする生活物資を得る、豊浦庄にとって重要な山であり、豊浦庄と桑実寺は一体の存在である。つまり、中世においては寺の建物だけが桑実寺のではなく、桑実寺が小別当を務める豊浦庄・桑実山を含めて桑実寺である。中世荘園制をふまえて、解釈する必要があると思われる。

続けて第六・七・八紙を見ていこう。第五紙の川の流れに沿って目を進めていくと、水源である叡山が描かれ、谷筋に中門と院家が現れる。中門を潜ると桑実寺本堂が現れ、定恵が堂供養を行っている。香衣の定恵を導師として、黒衣・墨染の僧が並ぶ。縁には結願者が座っているが、ここでも中央を占めるのは、被衣の女性たちである。

門の南側には髭を蓄えた武士の一団、尼・被衣の女性が座る。桑実寺にゆかりの深い一団だと思われ、義晴家臣団であろうか。先頭に座る人物は頭巾を被り僧衣である。上池院・竹田法印などこの時代は法体の医師がいること、薬師如来を拜んでいることからすると医師であろうか。

参詣者が詰めかけているが、石段中央を占めるのはやはり女性である。他には町人と思われる男性たち、僧侶、折烏帽子の武士、立烏帽子の公家がいる。ここに集まった人々を見ると、農村の人々ではなく、都の住

人である。この場面は堂供養場面と、その後桑実寺に「歩を運び、肩をきそう」と詞書に記された参詣者を描く異時同図である。参詣者の何人が指さす方向に目を進めると、瑠璃石の上に白馬と薬師如来が立っている。

瑠璃石に降り立った薬師如来、堂供養、その後の参詣者を同図で描き、しかも目を凝らせば、薬師如来は瑠璃石の上に今も立ち、その姿が見える人には見えることを描いているのであろう。

下巻第二段

詞書・その後阿閉皇女は元明天皇となり、桑実寺に登られ瑠璃石上の薬師如来と岩駒の足跡を拜まれた。元明天皇の治世は万民徳に帰し楽しんで。元明天皇は八歳龍女（八歳の女人でありながら、悟りを開き成仏できた法華経の女人成仏説話）の後身である。

靈仏が吾朝に現れたことは宇賀那（五穀豊穡の龍身の福神）の神験であり、当寺を信仰する人は竹生島（都久夫須麻神社祭神は弁財天・宇賀那・浅井比売命）に参詣するべきであろうか。元明天皇御諱は豊国成姫、この浦は豊浦と名つく。

絵・仁王像が祀られた山門から本堂まで桑実寺の全景が描かれ、さらに、元明天皇が瑠璃石に行幸したところが描かれる。そして、衆人が指さす方向に目を転じると、雉が一羽桑実山に止まり振り返っている。振り返った視線の先は、もう一羽の雉が桑実山にいる雉の許に飛んでくるところである。

第二段は再び桑実寺が描かれる。しかし、この段では第一段に描かれた板葺き屋根本堂・中門・狭い境内から一転して、仁王門を備え、檜皮葺きの本堂・中門・殿舎群、瓦葺の経蔵、朱塗りの三重塔を備えた立派な寺に変っている^⑤。この間の時間経過を表し、室町期の桑実寺を描く。

境内の地形は現在と同じで、観音寺城へ続く道や景清の背比べ石、桑井も描かれ、ここが桑実寺であることを表している。

中門には傘が重くて遅れてしまったのか、登ってきた階段を振り返る白傘袋を担ぐ白丁が描かれている。遅れてきた傘持ちは、ラストシーンの遅れてきた日光・月光菩薩と十二神将の伏線であり、元明天皇行幸の前触れであろう。傘持ちは本来主人の傍近く控えていなければ役目が果たせない。日光・月光菩薩と十二神将も本来薬師如来に近侍しなければ役目が果たせない。先述したようにキーワードは「後から寺に来る」である。来た道を振り返っているのは、上巻を振り返れというサインだろう。

そこで、上巻巻頭の寺と桑実寺を見比べると、上巻巻頭の寺が桑実寺ではなく、観音正寺であることに気づく。非常によく似た建築物が並ぶが、建物の配置も建物の細部も、境内の地形も異なっている。そして、二つの寺を比べると、建築物や地形が異なるだけではなく、そこに集う人々も異なっていることに気づく。桑実寺には、観音正寺に見られた巡礼者や麓の住民はいない。桑実寺参詣者は、本堂内の武士二人を除き、被衣の女性たちと稚児や弟子を連れした僧侶である。

本堂前には、末広扇を持ち元明天皇の方角を指す僧綱襟の高僧と山伏がいる。この二人は桑実寺の僧であろうが、都でもよく見られる人物である。例えば、近衛尚通の息子聖護院道増は山伏であり、大覚寺義俊は高僧である。つまり、桑実寺に描かれた人物は、都にいる人物、都から来た人物が描かれている。しかも、公家の男性はおらず女性が描かれているのである。

本堂の横に建ち並ぶ殿舎も、観音正寺の本堂横の舞殿が開け放ちであったのに比べ、明り取りの障子戸が建て回された公家邸のような書院

である。つまり、描かれた桑実寺は室町期公家の女性が都で生活する空間と酷似している。しかし、元明天皇は大津京（奈良時代の人物である。桑実寺は過去と現在、現実と物語が融合しているのである。

参詣者の何人かが手をかざし、指さす方向には元明天皇の行列と瑠璃石がある。元明天皇の行幸に気づかぬ参詣者もいるが、気づく人は気づくのである。七光寺に天皇は来なかったが、桑実寺には天皇が自らの意思で後から来るのである。

本堂前に赤毛氈鞍覆の黒駒、鶴毛駒、白駒、中門には先述した白傘袋をもつ白丁がいる。武家故実においては赤毛氈鞍覆・白傘袋は將軍及び特に將軍から免許された者だけが使用することができた。⁽³⁵⁾だが、『桑実寺縁起絵巻』に描かれている赤鞍覆の黒駒は白丁が曳いている。白傘袋も白丁が担いでいる。將軍の被官に白丁はいない。

將軍の厩者は上杉本洛中洛外図屏風に見るように、素襖・折烏帽子で、傘持ちは房である。⁽³⁴⁾白丁が馬を曳き、傘袋を担ぐのは公家の制である。『年中行事絵巻』⁽³⁵⁾には巻十五「関白賀茂詣」に白丁の居飼が描かれ、巻一の「朝観行幸」に白傘袋を担いだ白丁が描かれている。また、『延喜式』では、大臣以上は浅紫、参議以上は深緋、諸王五位以上は緑、諸臣は黄色の鞍覆を用い、六位以下は鞍覆を用いないと定めている。⁽³⁶⁾

桑実寺にいる馬の内、折烏帽子・素襖の人物が曳いている白馬が武士の乗ってきた馬で、鶴毛と黒駒は公家が乗ってきた馬である。桑実寺に描かれている武士は本堂で参拝している二人しかいない。白馬はこの武士の馬であろう。胸懸をつけた上等な馬であるから、参拝している武士も上級武士である。では、鶴毛・黒駒・白傘袋の主人はどこにいるのだろうか。他に桑実寺境内にいるのは僧侶と被衣の女性だけである。この鶴毛と黒駒は、元明天皇に扈從してきた公家の馬であろう。白傘袋、鶴

毛、赤い鞍覆の黒駒は、元明天皇が桑実寺に行幸してきた場面の前触れであろう。

第二段最後は、桑実山につがいの雉が揃うところが描かれている。この絵巻の絵詞は文明十五年制作の「桑実寺縁起」に基づいており、縁起冒頭に「爰此桑実寺者日域之佳名、弥陀之縁木也」とある。「佳(きじばと)」が描かれているのはそのためだろう。そして、そのポーズは、上巻巻頭の桑の大樹に描かれた金鳥・白兔と同じポーズである。この雉は金鳥・白兔の化身であろう。上巻に登場した金鳥と白兔は桑の大樹を挟んで左右に別れ、互いに別な方向を見ており、目を合わさない。しかし、下巻の雉は同じポーズながら、視線を合わせ、今まさに桑実山に雉のつがいが揃うところが描かれる。そして、これは次シーンの日光・月光菩薩の飛来へと続く。

下巻第三段

詞書・日光・月光菩薩は定恵の光を輝かし、十二神将は擁護の威を奮う。現世安穩・後生善処・医王善処の擁護あり。今、旧草をとりひろげて、聊かこれを後景に表し懇丹進めしむところ也。

絵・日光・月光菩薩が白緑の雲と白雲に乗って、十二神将・夜叉を引き連れ桑実寺に飛来する場面が二紙を継いで、大きく描かれる。

日光・月光菩薩は薬師如来の脇侍であり、本来は薬師如来と共に三尊揃って飛来しなければならない。十二神将も薬師擁護の神々で、薬師如来に近侍しなければならない。しかし、絵巻では薬師如来のみが仮の姿で飛来し、ラストシーンで、突然日光・月光菩薩が十二神将を引き連れ華々しく飛来する。しかも、薬師如来は小さく描かれるのに対し、日光・月光菩薩は、大きく描かれている。あたかも、日光・月光菩薩が主役かのようにである。日光・月光菩薩は上巻巻頭に登場した金鳥・白兔であり、

下巻第二段ラストシーンで登場した雉の本性である。

第三節 『桑実寺縁起絵巻』の主題と制作目的

絵巻の構成を検討しよう。絵巻では、上巻の七光寺で起きたできごとが、下巻の桑実寺で繰り返される。しかも下巻は、次のように上巻の最後から前へ話が戻っていく。

上巻・阿閉皇女↓天智天皇↓定恵の法会(七光寺)↓薬師如来の出現
下巻・薬師如来の出現↓定恵の法会(桑実寺)↓元明天皇(阿閉皇女)
異なっているのは、天智天皇が下巻では登場しないことである。なぜ、天智天皇が登場しないのであろうか。そこで、上巻の天智天皇を振り返ってみると、天智天皇は阿閉皇女を案じる父として登場している。下巻で天智天皇が登場しないのは、阿閉皇女が成長し、自らの意思で桑実寺に來る物語を描くためである。してみると、下巻で桑実寺に來た人物・仏は、全て自らの意思でやってきたことに気づく。上巻では、定恵も薬師如来も招かれてやってきた。天智天皇と阿閉皇女は七光寺法会に出席しなかった。しかし下巻では、薬師如来も、定恵も、元明天皇も自らの意思で桑実寺に來ているのである。

しかし実際には、元明天皇の近江行幸は記録がない。むしろ、古代天皇の蒲生行幸でまず想起されるのは、天智天皇の蒲生野遊獵である。この絵巻は額田女王と元夫大海人皇子の蒲生野遊獵での相聞歌「茜射す紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖振る」「紫草のにはへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも」(万葉集卷一、二十・二十一)を思い起こさせる。額田女王は天智天皇妻で本来恋仲にはなれない人だが、大海人皇子は遠くから袖振る。額田女王はその気持ちを受け止め、野守に見られていることを気遣いながらも蒲生野を行く。

下巻第一段の青とやや赤みがかった田が入り混じる豊浦庄に、紫雲に乗った八童子がやって来る場面は「西射す紫野」を描き、下巻第二段の元明天皇行幸場面を描かれている小さな鳥居は「標野」を表しているのではないだろうか。この相聞歌において、天智天皇は登場しないことに意味がある存在である。絵巻でも天智天皇は寺建立の指示をするが表舞台には登場しない。天智天皇はいわば黒幕なのである。

なお、上巻最初に登場した金鳥・白兔の遊ぶ伝説世界、現世の観音正寺境内、古代の阿閉皇女寢室という全く異なる時空間が、桑実寺では一つに融合している。しかも、少しずつ変化している。金鳥と白兔は雉となり、観音正寺は桑実寺となり、病気だった阿閉皇女は健康に育ち天皇となつて桑実寺に集結した。そして、上巻の阿閉皇女の寢室は、元明天皇の暮す宮殿かのような桑実寺本堂になっている。そして、桑実寺の大樹（將軍）の許に、つがいとなつた日光・月光菩薩が揃い、不完全だった薬師如来が完全な形に整い、話は上巻最初の桑の大樹の下に金鳥・白兔が遊ぶ世界に戻り終わる。

つまり、この絵巻主題は、成長した乙姫の元明天皇が父の庇護を離れ、自らの意思で桑実寺に後からやって来る。すると、雉のつがいが桑実山に揃い、日光・月光菩薩が十二神将を連れ桑実寺に揃い、不完全だった桑実寺が完全なものになるといふものである。

次に制作目的を検討しよう。この絵巻は伏線に満ちており、鑑賞者に読み解きを求める謎解きになっている。しかも制作者は、鑑賞者がこの絵巻が語らんとしていることを読み解くことを確信している。下巻で、瑠璃石の薬師如来・元明天皇の行幸・雉を指差す人が描かれているのは、単に前触れ・視線の誘導のためではなく、「気づく人は気づく」「見える人には見える」と語っているのであり、この絵巻には一見気づかな

いが、気づくべき重要なことがあることを暗示しているのではないだろうか。

制作者が鑑賞者として想定しているのは、絵巻としては異例といえる仏典・古典の漢語を駆使した難解な詞書を読みこなすことができ、歴史・地理にも通曉した教養ある人物である。しかも、じつくりと絵巻を見直すことのできる人物である。

そして、元明天皇が主人公であること、源氏絵のような阿閉皇女の登場や、室町期公家女性を取り巻く世界が桑実寺に描かれていること、上流階級の女性が数多く描かれ参詣者の中心であること、弁財天や八歳龍女など女性の仏が語られること、桑実寺は定恵所縁の寺すなわち、藤原氏ゆかりの寺として描かれていることから、鑑賞者として想定されているのは、公家の女性だと思われる。

もちろん、鑑賞者としてまず想定されているのは、足利義晴である。しかし、三条西実隆や土佐光茂は義晴の指示や承諾を得て制作しているのであり、実隆等が義晴に謎かけをしているのではない。では、義晴以外で、この絵巻を読み解ける人物、この絵巻のメッセージを受け取れる人物は誰なのであろうか。

天文元年の時点で、義晴身辺に公家の女性はいない⁵⁷。しかし、天文三年六月に近衛尚通の末娘（正妻維子の四女カ）慶寿院が桑実寺に嫁いでくる。そして、絵巻奉納直前の天文元年八月九日に桑実寺から近衛家に使者が来ており、絵巻奉納前日には絵巻制作依頼状の使者を務めた上池院も近衛家に来ている⁵⁸。この絵巻は、慶寿院に見せることを目的に制作されたのではないだろうか。この絵巻は「現実と物語」が融合していると繰り返し語っているのである。

おわりに

第一節では、『桑実寺縁起絵巻』制作時の政治状況を再検討した。従来將軍義晴が桑実寺に避難し、堺に足利義維、細川晴元がいたことから、この絵巻は義晴が桑実寺を疑似都として描くことよって、正統性を主張する事が主題であるとされてきた。しかし、細川晴元は義晴と結んでいた。また、絵に描いた天皇を家督争いの正統性の根拠とした例はない。さらには、義晴にとって桑実寺はあくまで一時動座している場所に過ぎず、また、そうであらねばならないのである。

そこで第二節は絵巻を改めて検討した。上巻は桑実寺とは無関係の七光寺建立譚であり、全て伏線である。下巻のクライマックスは、後から乙姫元明天皇が寺に來ると、金烏・白兔、雉の番いの本性である日光・月光菩薩が桑実寺が揃い、桑実寺が完全な形になるといふ部分である。そして、女性が主人公であり、桑実寺が室町期の都に住む公家女性の生活空間と酷似して描かれていることが分かった。この絵巻は「過去と現在、現実と物語」が融合しているのである。

第三節では絵巻の主題を検討し、制作目的の仮説を提示した。下巻は、上巻の最後から前へと話が戻っていく。そして、上巻とは対照的に、葉師如来、定恵、元明天皇が、全て自らの意思で桑実寺に來る。天智天皇のみ登場しない。だが、元明天皇近江行幸は記録がなく、むしろ天智天皇が蒲生に行幸したことは文学上有名で、天智天皇の蒲生野遊獵における額田女王と大海人皇子の相聞歌を思い起こすことになる。この絵巻には、本来恋仲になれない人に遠くから袖振る大海人皇子と、標野を作った野守に見られていることを氣遣いながらも蒲生野を行く額田女王の恋

歌が隠されているのだろう。

くわえて、天智天皇は七光寺建立の指示をした発願者だが、七光寺法会に出御しない。また、天智天皇は蒲生野遊獵の主催者だが、額田女王と大海人皇子の相聞歌に登場しない。天智天皇は絵巻でも恋歌でも物語の発端を指示したが、表舞台に登場しない黒幕なのである。

この絵巻の主題は、第四姫の元明天皇が桑実寺に來ると、桑実山に雉の番いが揃い、日光・月光菩薩が十二神将を引き連れ桑実寺に揃い、桑実寺が完全な形になるというものである。つまり、都の高貴な乙姫が成長し、父の庇護を離れ自らの意思で後から桑実寺に來る。すると番いが揃い、太陽と月が桑実寺に揃い完全な形になる。父は発案者だが表舞台に登場しない黒幕である。父から相談・指示を受けた定恵が実行役であるところの絵巻は語っているのである。

そして、制作者が鑑賞者として想定しているのは、①教養ある人物である。②女性が主人公で、参詣者も公家の女性を中心である。③女性の仏が語られる。④桑実寺は室町期の公家の女性が都で生活する空間と酷似して描かれている。⑤桑実寺は藤原氏ゆかりの寺として描かれている。以上の点から想定された鑑賞者は公家の女性であろう。天文元年の時点で桑実寺の義晴周辺に公家の女性はいない。しかし、絵巻奉納の一年九ヵ月後に近衛尚通の五女(正妻の四女カ)慶寿院が桑実寺の義晴に嫁いでくる。この絵巻は慶寿院に見せることが真の制作目的ではないだろうか。そこで、本編(下)では、『桑実寺縁起絵巻』制作の経緯と近衛尚通の動きを検討し、將軍家と摂関家の前例のない結婚の経緯を検討したい。

註

- (1) 「嚴助往年記」天文三年六月二十九日条(史籍集覽)。「お湯殿の上の日記」天文三年九月三日条。
- (2) 黒島敏「山伏と将軍と戦国大名」(『年報中世史研究』二九、二〇〇四年)。湯川敏治「足利義晴将軍期の近衛家の動向」(『日本歴史』六〇四、一九九八年)。高梨真行「将軍足利義輝の側近衆」(『立正史学』八四、一九九八年)。
- (3) 吉田友之「桑実寺縁起絵(上)・(下)——土佐光茂試論(四)・(五)」(『芸術論究』四・六編、一九七七・一九七九年)。
- (4) 榎原悟「桑実寺縁起絵」(『MUSEUM』四〇一、一九八四年)。
- (5) 島谷弘幸「桑実寺縁起」と三條西実隆」(『古筆学拾穂抄』木耳社、一九九七年)。
- (6) 鈴木景二「現地調査から見た在地の世界—近江国薬師寺領豊浦荘・興福寺領鮎江荘」(佐藤信・五味文彦編『土地と在地の世界をさぐる—古代から中世へ—』山川出版社、一九九六年)。
- (7) 松本裕美「『桑実寺縁起絵』にみる古代薬師・観音伝説」(『東京女学館短期大学紀要』一三、二〇〇八年)。
- (8) 高岸輝「琵琶湖岸の同床異夢—足利義晴・三條西実隆と「桑実寺縁起絵巻」(『室町絵巻の魔力』吉川弘文館、二〇〇八年)。
- (9) 亀井若菜「桑実寺縁起絵巻」研究」(『國華』一一九三、一九九五年)。「表象としての美術、言説としての美術史」ブリュッケ、二〇〇三年に再掲。
- (10) 同「桑実寺縁起絵巻」について」(『表象としての美術、言説としての美術史』)。
- (11) 末柄豊「細川氏の同族連合体の解体と畿内領国化」(石井進編『中世の法と政治』吉川弘文館、一九九二年)。設楽薫「将軍義晴期における「内談衆」の成立(前編)——享祿四年「披露事条々」の検討を出発点として」(『室町時代研究』一、二〇〇二年)。山田康弘「戦国期室町幕府と将軍」吉川弘文館、二〇〇〇年。
- (12) 池享「戦国・織豊期の朝廷政治」(一橋大学研究年報『経済学研究』三三、一九九二年)。「戦国織豊期の武家と天皇」に再掲。堀新「戦国大名織田氏と天皇権威—今谷明氏の「天皇史」によせて—」(『織豊期王権論』校倉書房、二〇一一年)。初出一九九三年。
- (13) 「後愚昧記」永徳元年八月十二日条(大日本古記録)。
- (14) 平安京がいつ廃止になったのかは明らかではないが、豊臣秀吉の京都改造により平安京が廃止されたと考えている。今後さらなる検討が必要だが、京都改造は、平安京を廃止し、名実ともに京都を秀吉の支配都市とするための施策だったのではないかと考えている。
- (15) 『実隆公記』大永八年三月夏七月紙背文書、巻七、二五九頁。
- (16) 『二水記』大永七年三月十三・二十四日条。
- (17) 『実隆公記』大永七年六月十七日、七月八・十一・十三日条。
- (18) 『実隆公記』大永七年十月十三・十四日条。
- (19) 『二水記』大永七年十一月十六・十八・十九日、十二月九・十七日、大永八年正月十七・二十八日、二月九日、三月六・十八・十九日条。
- (20) 『二水記』大永八年三月六日、四月二日、五月二・十四・二十八日条。
- (21) 馬部隆弘「『堺公方』期の京都支配と柳本賢治」(『ヒストリア』二四七号、二〇一四年)。
- (22) 『二水記』大永八年七月二十九日、享祿元年八月二十、二十八、九月八日、閏九月二十二日条。
- (23) 馬部隆弘「『堺公方期』の京都支配と松井宗信」(『中近世の領主支配と民間社会』熊本出版文化会館、二〇一四年)。
- (24) 『蜷川家文書』五〇一・五〇二号。前掲注(21) 馬部論文。
- (25) 『後法成寺関白記』享祿二年十月十九日条。前掲注(23) 馬部論文。
- (26) 前掲注(23) 馬部論文。
- (27) 村井祐樹編『戦国遺文 佐々木六角氏編』東京堂出版、三〇一。前掲注(23) 馬部論文。
- (28) 「南行雜録」一、(東京大学史料編纂所蔵謄写本)。馬部隆弘「桂川合戦前後の細川晴元方による京都包囲網」(『戦国史研究』六五、二〇一三年)。
- (29) 『後法成寺関白記』享祿元年六月二十三・二十四日、七月三・十三・十七・二十二日、八月六・二十六日条。
- (30) 奥野高廣「『堺幕府』論」(『日本歴史』三三八、一九七五年)。
- (31) 『二水記』享祿三年六月二十九・三十日、七月十四日、享祿四年二月四日条。

- (32) 『二水記』享祿三年八月三十日、九月十九日、十月九日、十一月三十一日条。
 (33) 『上杉家文書』四一六号。
 (34) 『二水記』享祿四年八月二十二日条。
 (35) 『二水記』享祿五年正月十九・二十・二十一・二十二・二十七・三十一日条。なお従来持隆は晴元従弟とされてきたが、馬部隆弘氏は、晴元弟とする。すると、四国側は晴元・持隆がともに十代である。(馬部「細川澄元陣営の再編と上洛戦」(『史敏』十四、二〇一六年)。元長は三十二歳で死去とされる(長江正一『三好長慶』吉川弘文館)。
 (36) 天野忠幸『三好長慶』ミネルヴァ書房、二〇一四年、二二二～二四頁。
 (37) 小松茂美『続日本の絵巻24 桑実寺縁起』八頁、中央公論社、一九九二年。
 (38) 吉田友之『桑実寺縁起絵』の制作」(『続日本絵巻大成 桑実寺縁起』解説、中央公論社、一九八二年)。
 (39) 沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉『藤氏家伝―鎌足・貞慧・武智麻呂伝注釈と研究』吉川弘文館、一九九九年。
 (40) 野村育代「大姫・乙姫考」(『ジェンダーの中世社会史』同成社、二〇一七年)。
 (41) 『戦国の城―安土城への道』安土城考古博物館、二〇〇九年、図版34。
 (42) 松下浩「東家所蔵「江州蒲生郡下豊浦村与須田村山論立合絵図」(『織豊城郭』二号、一九九五年)。
 (43) 前掲注(6) 鈴木論文。
 (44) 角田文衛「天平感宝元年聖武天皇勅書考証」(『律令国家の展開』角田文衛著作集第三巻、法蔵館、一九八五年)。初出一九三九年。
 (45) 『大日本古文書』三、「聖武天皇施入勅願文」二四二頁。この文書は鎌倉時代の写しとみられる。
 (46) 『安土城・1999』安土城考古博物館、一九九九年、六六頁。下豊浦・上豊浦・常楽寺・小中・慈恩寺・香庄の地域を描いている。
 (47) 『近江蒲生郡志』巻一、第二編寺院領豊浦庄項、蒲生郡役所、一九二二年。
 (48) 『大乘院寺社雑事記』延徳三年九月十八日、十月一・二十七・二十八日条。
 (49) 『大乘院寺社雑事記』延徳三年十月二十八日条。
 (50) 『安土城・1999』安土城考古博物館、一九九九年、六四頁。前掲注(42)

松下論文。

- (51) 『大乘院寺社雑事記』長享元年十月二十四日条。
 (52) 観音正寺・桑実寺建物の比定は、藤井恵介氏の御教示を得たが、不正確な描写で、建物を確実に比定することはできなかった。
 (53) 前掲注(9) 亀井著書。「宗吾大草紙」(群書類従二二輯武家部) 六〇六、六一一頁。瀬田勝哉「公方の構想」(『洛中洛外の群像』平凡社、一九九四年)。二木謙一「偏諱授与および毛氈鞍覆・白傘袋免許」(『中世武家儀礼の研究』吉川弘文館、一九八五年)。
 (54) 拙稿「上杉本洛中洛外図屏風に描かれた將軍の行列」(『ヒストリア』二五七、二〇一六年)。
 (55) 『年中行事絵巻』日本絵巻大成八、中央公論社、一九七七年。
 (56) 『延喜式』下、彈正台、(神道大系古典編十二、神道大系編纂会、一九九三年、六一四頁)。
 (57) 「江州於桑実御台様むかへニ御祝目六」国立公文書館蔵写本、請求番号一五三―〇二〇五。
 (58) 拙稿「上杉本洛中洛外図屏風注文者 近衛氏の生涯」(『日本女子大学大学院文学研究科紀要』二二二、二〇一七年)。

本稿は、公益財団法人出光文化福祉財団調査・研究助成を受けた成果である。

(史学科博士課程後期 2017年修了)

The theme of The "Kuwanomi-Temple Picture Scroll"

(Kuwanomi-Temple Emaki)

KOTANI Ryoko

[Abstract] The "Kuwanomi-Temple Picture Scroll" (Kuwanomi-Temple Emaki) is depicts the story of the Kuwanomi-Temple beginning. This

Picture Scroll was made to order by *Yoshiharu Ashikaga* the shogun of the Ashikaga shogunate in 1532 year.

At that time, he had taken refuge in the *Kuwanomi-Temple* for vassal rebellion. So the prior studies thought this Picture Scroll theme is the defeat of the vassal rebellion. But by the time of make Emaki, *Yoshiharu* had already reconciled with the enemy. So, this paper wants to review the subject matter.

The *Tenchi-Emperor's* fourth daughter falls sick in the capital of *Shiga* in this Emaki story. Then, the *Tenchi-Emperor* builds a temple, and he commanded to pray to *monk-Jyoe* for his daughter. Then the *Yakushi-Tathagata* (The Tathagata who cures disease) emerges from the lake, and his daughter's illness was healed. However, *Tenchi-Emperor* did not go to the temple.

Afterwards, the *Yakushi-Tathagata* flew to the east. And *Yakushi-Tathagata* got to the *Kuwanomi Mountain*. The footprints of the *Yakushi-Tathagata* now remain on the rocks. But the Moon Buddha and the Sun Buddha, the Twelve Gods, did not come with the *Yakushi-Tathagata*. They are vassals of the *Yakushi-Tathagata*. The monk-*Jyoe* built the temple on the *Kuwanomi Mountain* for the *Yakushi-Tathagata*.

Several decades later, the fourth daughter of *Tenchi-Emperor* became Emperor.

Her name was *Gemmei-Emperor*. *Gemmei* went to the *Kuwanomi-temple* and worshiped the footprints of the *Yakushi-Tathagata*. Then, two pheasants flew in. They were incarnation of Moon and Sun

Buddha. Then, the Moon and the Sun Buddha, and the Twelve Gods came to the *Kuwanomi-Temple*. The *Kuwanomi-Temple* is complete and the story ends.

Tenchi-Emperor is the mastermind who does not go to the temple, only by doing the instruction in this story. But the fourth daughter *Gemmei-Emperor* goes to *Kuwanomi-Temple* from the distant capital city. They are ancient people, and this story is an old Tale.

The minister *Konoe-Hisamichi* instructed to make "*Kuwanomi-Temple Picture Scroll*" to *Doctor-Jyuchin* in the year 1532. However, he did not go to the *Kuwanomi-Temple*. Instead, he sent the *Doctor-Jyuchin* to the *Kuwanomi-Temple*. He consulted with *shogun-Yoshiharu* about making "*Kuwanomi-Temple Picture Scroll*". When the "*Kuwanomi-Temple Picture Scroll*" was completed, the minister showed the *Picture Scroll* to his fifth daughter.

The fifth daughter of the minister *Konoe* from the capital of *Kyoto* comes to the *Kuwanomi-temple*, and she was married *Yoshiharu-Ashikaga who the 12th shogun of the Ashikaga shogunate* at 1534 year. Many retainers came with her.

The emperor-*Tenchi* is the minister-*Konoe*. They are fathers, and do the first instruction, but not go to the temple. The monk-*Jyoe* is *Doctor-Jyuchin*. They are the executor in this marriage story. *Gemmei-Emperor* is minister-*Konoe's* daughter. They are both younger sisters and go from the distant capital to the *Kuwanomi Temple*. When they come, *Kuwanomi Temple* is be perfect. The minister-*Konoe* wanted his daughter to marry the shogun-*Yoshiharu*

by her own will.

The theme of this Picture Scroll is the marriage of the shogun-
Yoshiharu and the minister-*Konoe's* daughter.

[Key Words] *Kuwanomi-Temple, Yoshiharu-Ashikaga, Konoe,*
Emperor, marriage